も決して充分だとは言へない。

たとへば、財政的にももつと發展し、大身延としての資源を豊富にする必要があらう。祖廟擴張の事業はすでに着々として進められてゐるが、それと同時に支院の布置等も考慮し、山容を整美することも必要であらう。大身延町の都市計畫も一考する必要があらう。更に遠大の計畫としては、戒壇建立の準備をもう今からそろ〳〵始めて置くのも必要であらう。とにかく將來の大宗門を豫想し、それにふさはしい大身延を豫想して總てを計畫せねばならぬ、所謂身延は末法萬年の闇を照破すべき光の根元である。大宗門の身延どころではない。日本の身延であり、東亞の身延であり、八紘一宇の皇謨と四海歸妙の宗謨とが實現し、事壇建立の曉には實にこれ世界の身延である。今やその曙光は正に輝きそめたのである。今この新體制樹立の機運こそ、身延もまた新體制を樹立すべき好機で、この機會に須らく遠大なる末法萬年の計畫大身延確立の計畫を樹てゝ頂きたいと思ふ。

宗門新體制の樹立せんとするに方り、ちやうど「棲神」同人より、學院創立三十周年記念號に寄稿を求められたので聊か所懷の一端を述べた次第である。

大火所燒時

綱脇龍妙

◇はしがき

猛烈に忙しい私が、今日本山に上り學院の校舍が大層美しく見違へる樣に立派に修繕せられたと聞いたので、行つて見ると如何にも其の通り、實に麗しく全然建て更へられたかの樣に變つてゐる。けれども好く觀ると本節は元の儘のが、實に上手に

改繕修飾且つ增築擴張せられてゐる。そこで私は二十幾年前の昔、此の本校舍の建築費を寄附して貰つた福井縣武生町の青山市之助氏に此の事を報らせたら如何に喜ばれるだらうと、自らも嬉しかつた。二階の各室から新建の部まで一通り視て歸らうとする所に、「棲神」編輯部の幹事が來られて、三十周年記念號に何か大至急に、其れも明後日の締切りの間に合う樣に書いて呉れとの依頼、曾て一度隨筆の樣な物を出した切り、毎回頼まれても書けた事が無いので、ふと學院とは切つても切れぬ緣故の深い青山氏について想ひ出すまゝに書いて見る事にした。

◇豊年飢饉

明治十六、七、八の三年續きとか、日本は全國豊作が續いた。哀れなのは反つて農村で、米が汎濫して、福井縣地方は玄米四斗六升俵が只の壹圓拾何錢といふ嘘の樣な談。此れが實際である事は私が幼少で當時郷里福岡縣で玄米三斗四升俵が、壹の七拾幾錢であつた事を記憶してゐる。

青山氏の家は頗る舊家で、其の別家か或は本家かの影山家からは、大道妙泰寺の歴代日明上人を出してゐる。父は金貸を業としてゐた。

豊作飢饉の影響は、忽ち町の金貸業にも及ぼして、農村からの田畑の抵當物は、皆悉く質流れとなつて終つた斯くなつては青山家の財産は無くなる計りか、差引勘定大きな負債となつて終つた。義理堅い青山氏の父は、世間に申譯け無いと、總ての財産抵當物、家屋敷まで賣拂い、果せるだけの借債を償い、自らは無一物となり、最早郷土の土を踐まぬ覺悟で千個寺詣りの姿に變り、曉に妙國寺の先祖の墓に別れを告げ、飽かぬ悲しみの中に武生町を出立した。時に市之助氏は十六歳。母は已に喪くなつてゐた。武生の町を離れて一里鯖江の町がある。淨土眞宗の本山誠澄寺の山門前まで來て、親子は茲に泣き別れを告げた。市之助氏は、私に、茲の所を語る時に、眞實數行の涙を頰に流し、凡そ世の中に、悲しき事の多くある中に親子の生き別れ位、つらいものは無いと泣き聲に語られた。

市之助氏は歸る家が無く、菩提寺妙國寺に來て、時の住職の學者であつた森崎日創師に面會したら、好し其れ

では寺に居て、會計でもして居れと謂はれて、確かりした性質で未だ子供乍ら會計を預かつた。

◇青山蠟燭

半歳計り寺の會計を爲した市之助氏は、青山家再興の念に燃えてゐたので、いつまで寺にゐてもと、親戚と相談して、町の中心地の然も小路の敷明と云ふ、間口二間の家を借り、僅か十六歳乍ら獨りで蠟燭製造販賣業を創めた。天性正直勤勉の市之助氏、自炊で殆んど年中、夜半一時より早く寢た事が無く働いた。其の內親戚の人達が、其れを見兼ねて、妻お千代さんを嫁取らせた。

誠實の魂の籠つた蠟燭は、忽ち評判と爲り、町から近郷に掛けて青山蠟燭の名で、商賣は漸々に繁盛して來た家政も從つて豊になつた。

◇父還る

商賣に夢中になつてゐる幾年目、風の傳りに、父親は佐渡塚原根本寺に、食客となつてゐるとの事に、大に喜んで直ぐに迎へに行つて、無事に連れて歸つて來た、そうして夫婦で父を勞はり孝養を勵んでゐた。三年計りして父は安心の中に、六十餘歳を、今生の限りとして、靈山淨土に往詣した。青山院澄月日明信士の法號を私は記憶してゐる。

◇訪問客

父親が逝つて間も無く、日清戰爭が始まつてゐた。或る朝、店の前に人力車を乘りつけて、中から現れた長髯の黑紋附羽織に、仙臺平の袴を着けた、大分立派な紳士が、大きな名刺を出して、恭や〳〵しく手を着いて、

「私は富山縣……郡……村の者、先年貴氏の御父に、大恩に預かつた者、疾くに御禮に參るべきを、あれ彼れして遲くなり、此の度漸くに都合がつき、京都十六本山參詣を兼ねて當家に御禮に參るべく、往路此の町の米庄旅館に宿り、貴家の事を尋ねた所、「其の家は解散し且つ父親は喪くなり、後繼は何處に往つたか判らぬ」との事に非常に落膽して、餘儀なく先に十六本山に參拜し、歸路敦賀港まで引返へして來て、同所米七旅館に宿り、歎息

して貴家の事を談した所が、意外に此處に營業してゐられる事を聞かされ、昨夜は又此處の米庄旅館に泊り、斯くお伺ひ致した次第。大恩人の御父上に面會出來ぬは殘念だが、何卒お位牌にだけなりとも、」との事に、直ぐ奥の佛壇に案内すると、其の紳士は暫くの間、位牌の前に手をつき、涙を垂れ、何やら小聲に頻りに述べてゐられたが、やがて香を炊き、讀經唱題をして、涙を拭き、京都から買つて來た物だらう大きな田舍には見ぬ立派な菓子箱を出し、お靈前にと差し出された。そうして

「大層御商賣がお忙しい樣ですが、今夜お隙が出來ましたら、宿までお出で願ひます。是非お譚申し度い事もありますから」との事に、土地名物の廣田の墨流しの土産を買ひ、米庄旅館を訪れると、お茶を汲んでの客の譚し父親との因緣は斯うであつた。

◇素人驗者

紳士の家は富山縣北陸街道筋の相當の門構への家である。或る日の暮方近く、一人の千個寺詣での人が來て、門を入り門口に立ち、太鼓を鳴してお經を上げ回向をした。紳士の妻は聊かの供養をして、風體賤からぬ行者を見て、お茶でも召せと休稽を勸めた。行者は遠慮せず緣に腰掛けて、

「時に、貴家には主人か、或はお世繼か、大事な方に御病人が出來てゐるでしよう」

との事に、妻が驚き、其の理山を質した所、行者は

「あそこに新しく建てゝある彼の便所は、誠に方角が惡い、キツと大事な方に祟つてゐる筈」

と、奥の間に長の病氣に惱まされて寢てゐた紳士、此れを耳にして這ふて出で、

「お千個寺サン、そう仰さるれば違い無い、私があれを建てゝ間も無く寢ついて以來、醫者も藥も何等甲斐無く只死を待つてゐるより致方が無い有樣、誠に恐れ入りますが、お泊りが願へませぬか」との事に、先を當て無しの世を明らめた市之助の父親、それではと、其の家に三四泊して、精魂を罩めて御經を讀誦し御題目を唱へ、病

氣平癒を祈つて遣つた。感應此處に現はれて、滯在中に紳士の病氣は拭ふた樣に平癒した。紳士は驚いて、

「私の家も代々法華宗だが、法華經が、斯る有難い御經とは知らなんだ、私もすぐに御經を習つて、他の難儀を助けよう」と、懺悔的に心に誓つた。其の千個寺は前記の通り佐渡に行つて、後息子に迎へられて、武生の家で喪くなつたのである。

紳士の方は、お寺に行つて熱心に御經を習ひ。覺えた御經で、病人さへあれば親切に御經を讀んで、段々に御利益を顯はし、二、三年後には近鄕まで大評判となつて來た。

◇天狗つき

ある冬の嚴寒の雪さへ已に積もつてゐる日、數里隔てた、相當大きな酒造業の、淨土眞宗の信仰の家から、次男坊の二十六歳が病氣だから賴むとの事に、出かけて行つて見ると、大男が顏を眞紅に上氣して、荒れ狂ふてゐるのを、此れも大男の酒男達が五、六人もかゝつて取り押へに困まつてゐる。紳士は手の着け樣が無いが、やおら金襴包みの法華經を取出して、朗々と讀誦した。氣狂坊が此れを見て、ニッと瞰み附け、

「貴樣、生意氣な、法華經だなんて、斯んな事が出來るか」と、側の大きな鐵火鉢に盛んに起してあつた堅炭の火を兩の手に山盛り握んで、

「どうだ。貴樣には出來まいが、」

と、紳士の鼻の先に突出した。負けぬ氣の紳士も、此れにはギョッとして色を失ひ、爲す所を知らなかつた。

（しまつた。おれも此れでお終いか、然し殘念だ。法華經の行者だ、頸の坐に坐られた日蓮聖人の弟子檀那だ、他の爲す事が遣れぬ筈は無い）と、思ふと同時に、紳士も兩手に、山盛りに紅蓮の如き炭火を握み、口の中で

「大火所燒時、我此土安穩」

と、力と心とを罩めて唱へ出した。不思議や毫しも熱さを感ぜぬ。紳士は餘りの嬉しさに、大聲を張り上げて、

「これ見よ！」

と、叫んだ。氣狂坊が此れを見て、ニコッと笑ひ、

「ういな奴だ！これや談せるわい。然し貴樣はえらい奴だな。其れでは謂うて聞かせるが、己れは立山の天狗だぞ、此の間己の子供等が、此處の山で無邪氣に遊んでゐる所を、こ奴が草刈りに來て、知らずではあるが、頭から尿をはじきかけやがつた。餘りの惡さに己が附いてやつたが。貴樣に免じて除いて遣る。然し貴樣はえらいよ！此れから己れが力を貸して遣る。然しそう謂うても信じられまいが、先づ己の姿を見よ」

とて、直く側で天狗姿を影現して見せた。其の姿は稍々小男で、眼はギラ〳〵と光り、赫ら顏、鼻は鈍角、頭ははげて毛が後に白く長く少しばかり生えてをり、繪にある樣な天狗團扇を片手に持ち、着衣は羽の如く薄く輕く茜色、坐してゐるのか疊との間三寸計り消えて見えぬ。

「好く見よ、好く見よ、もう善いか」と、姿を消した。後は略する。紳士は天狗の姿を見た通り、畫家に畫かせて、大事に所持してゐて、其れを市之助氏に見せたのであつた。私綱脇は天狗なる者を今でも信ずる事は出來ぬが、其れかとて絶對に否定もなし得ぬ水中に魚が居り、陸上に動物や人間が居る如く、大氣中に如何なる生物が存在せぬとは謂れぬから。然し其れは兎に角、人の强い精神は不思議な働きを場合に現はすものであり、平常でも精神の持ち方が、其の人の健康上にも、能率の上に、非常なる差を生ずる事は、日常絶えず味ふてゐる事であり、曳いて唯心法界一念三千の佛のお悟りも、疑へぬ事であり、久遠本佛の靈在を信ぜざるを得ぬのである。

（終り）

附記　本文は文中にもある通り小生の無理な要求を心良く引受けられ御多忙中二晩の睡眠時間を節して書かれたものです、四十枚にわたる原稿でしたが紙面の都合により半分にした事を謹んで執筆者にお詫申上ます。

（石川生）